

主な
栽培品目

栗（銀寄栗・和栗）



垂れ下がっている白いものが栗の花（6月頃）



トラックの荷台にてんこ盛りの“銀寄栗”



地域の農を支える生産者

能勢町下田尻地域

ナカタニ ヒロシ

中谷 博さん

(75歳)

能勢町の“銀寄”を
世界農業遺産に
再度、もう一度
申請しましょう。



宝暦3年（1753年）、現在の広島県へ旅した村人が栗の実を持ち帰り、蒔いた未生が結実し、栗林の元祖となりました。天明寛政の頃、歌垣盆地に大かんばんつがあり、代価を得るために村人が丹波亀山へこの栗を売りに行ったところ、多くの銀札を得ることができたことから、この栗を“銀寄”と呼ぶようになりました。その後、文化年間、倉垣村の庄屋、奥勘左之門が山地をひらき、増産をすすめ、収穫した栗を将軍や御所に献上したことは文献にもみられます。現在も樹齢200年

栗の王様・倉垣銀寄“物語”

※世界農業遺産とは：社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接に関わって育まれた文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）であり、国際連合食糧農業機関（FAO）により認定されます。（農林水産省HPより引用）

① “銀寄”は今や全国ブランドですが、名前の由来などお聞かせください。
A それは旧倉垣村の村人様です。秀吉様は大阪城を、大阪の大商人 淀屋様は淀屋橋を残されましたが、この人の名前はわかりませんが、能勢町に“銀寄”を残されました。旧歌垣農協の昭和61年の広告記事をご紹介します。

② これからの目標や夢をお聞かせください。
A ①目標は3反(900坪)に150本、収穫300kgです。②夢は能勢町の“銀寄”が“世界農業遺産”になることです。役場は数年前、その申請をしました。昭和30〜40年代なら合格していたでしょう。能勢町は、池田市の5倍の面積があります。その里山に今は、耕作放棄地もあります。能勢町の多くの人が1本でも多くの苗木を植えられて、再度、もう一度、役場が世界農業遺産の申請をしてくれることです。ちなみに栗の出荷量全国一位は茨城県です。

③ 私の初孫(豊中市在住)が「おじいちゃん、僕、虫の食べるとる栗は食べないよ。」と言わ

を越える木が点在しています。“倉垣銀寄”は、その光沢と果肉の色、芳香、甘味とも他に類を見ない特別なものがあり、ここ歌垣の秋の自然を見事に果実の中につつまこんでいます。(原文のまま)

④ どうして栗を植えるようになったのですか。
A 祖父・市治郎が植えました。栗の木、根本直径30〜50cmの巨木が数本ありましたが、段々と枯れてきました。知人・友人・娘に毎年送っていました。知人が、もう送れなくなるなあと思っていた矢先、役場が半額補助で栗の苗木を販売しているのを知っていましたので申し込みました。新たに2反の耕作放棄地を加えて3反に苗木を植え始めて10数年になります。営農生活部 西村様、他職員のご指導・現地見学会・剪定・接ぎ木等の研修会に参加しました。仕事は見えて聞いて覚えるものですが、大変参考になりました。お礼を申し上げます。

⑤ 大変だったこと・つらかったことはありますか。
A ①鹿に親指ほどの若木の皮を食べられたことです(20本くらい)。もう全滅です。鹿という動物、この者の運動能力を甘くみてはいけません。柵の高さは1.8m必要です。②10年を過ぎて根本直径15cm、高さ・幅ともに4.5mを超えて、これからたくさん採れるという木が枯れることです。③私の初孫(豊中市在住)が「おじいちゃん、僕、虫の食べるとる栗は食べないよ。」と言わ